

「百合香、百合香じゃない。」

駅の構内で、後ろから声をかけられて振り向くと、そこには大学時代の友人、梨恵の姿があった。

「久しぶりね。卒業以来かな。もう2年くらい会ってないよね。」

学生の頃には、数人の仲間と一緒に、よく遊んだが、就職してからは、その仲間もバラバラになって、顔を会わせることは途絶えていた。

「こんなところで会うなんて偶然ね。仕事帰りなの。」

「そうよ、卒業してからは、ずっと同じ会社でOLしてるの。百合香もそうかな。」

梨恵の勤める会社は、この駅の近くだったのは記憶にある。

私が帰宅途中で乗り換える駅だけど、こんな人ごみの中で、ばったり会うとは思ってもいなかった。

時刻は金曜日の午後7時をちよつと回った頃。

私は、週末の予定は何も無かったし、梨恵も、誰かと連れ添っている様子はなかった。

「これから何か予定でもあるの。久しぶりだから飲みにも行かない。」

「行く、行く。どうせ帰っても、一人で夕飯するだけだしね。」

そんな話で、私と梨恵は、近くの居酒屋で、ちよつと奥まった個室風の二人席に落ち着いたのだ。

「さすがに、この辺にお勤めだけあって、良い感じのお店を知ってるのね。こんな席で、彼氏と差し向かいでデートするのかな。」

「そんなこと無いわよ。この店は会社の飲み会で来たことはあるけど、大勢でワイワイ飲むだけだからね。こういう席のカップルを、嫉妬と羨望のまなざしで眺めてるだけよ。」

そうやって梨恵は笑う。

「そう言えば、百合香、彼氏は。あの頃、付き合ってた男の子居たでしょう。」

「あいつは、今、九州に居るけど、卒業したら自然消滅。就職してからは会ってないわ。今頃、向こうで彼女でも作ってるんじゃないかな。」

「なんだ。二人とも淋しい身の上なのね。」

そう言うけど、梨恵はちよつとも淋しそうではなかった。

あれこれと食べて、何杯か飲んで、二人ともほろ酔いになって盛り上がった頃に、梨恵がこんな話をし始めた。

「この前、ちよつとおいしいアルバイトをしたの。」

一度きりだけど、一時間程度の仕事で3万円。」

「なにそれ、時給3万円の仕事ってこと。なんだか危ない闇バイトみたいね。」

「闇バイトじゃないよ。犯罪とかには関係ない話。」

「じゃあ、エッチ系。パパ活とかで金払いの良い相手を捕まえたとか。」

「もう女子高生じゃないんだから、パパ活でもないでしょう。」

それに、あんなのは売春でしょう。違法行為よ。」

「じゃあ何だろう。時給3万円のバイトって。」

「実はね、AV出演。」

私はおもわず「AV！」って叫びそうになる。

梨恵は、唇に指を立て、私に静かにするように促した。

「それって、パパ活よりも危なくない。」

「ところが、そうでもないんだ。セックスもしないし、服も脱がないの。」

「どういうこと、それでAVになるの。」

「世間には、いろんな趣味の人が居るのね。私も驚いたけど、女の人のウンチを見たがる人も居るんだって。」

まあ、そういう趣味の人も居るんだろうけど、私にはそんな気持ちは理解出来なかった。

「ほら、フェチってあるじゃない。足の指が好きだっていう人や、腋の下が気になって仕方ないって人とか。ウンチとかおしっこが好きっていう人も居るのよ。」

そういうものなのかな。

おっぱいとかあそこかを好きっていうのは王道なんだろうけど、それ以外にもあれこれ好みはあるんだね。

そう言えば、前に付き合ってた彼は、私の耳が好きって言って、良く触りたがってた。

「それで、AVって。もしかして。」

「そう、カメラの前でウンチをするだけの仕事。それで3万円よ。」

「なんだか恥ずかしいような、簡単なような、微妙なアルバイトね。」

「でも、どうせウンチなんて誰でも毎日してるでしょう。それを撮られるだけでお金になるなんて、美味しい仕事よ。もし、百合香もやってみたいなら、紹介してあげるわ。」

「そうね、3万円は魅力ね。」

そんな話で、女二人で盛り上がって、その晩は別れた。

部屋に帰ってから、梨恵の話を思い出して「AV ウンチ」って検索してみた
ら、想像以上に沢山出てきた。

アダルトサイトだから、ちよつとエッチなシチュエーションになったドラマ仕立てのものから、単
純にウンチをしているところを撮っただけのもの、自撮りでウンチする姿や、浣腸してウンチを出
すものもある。

ネット上に動画が上がっているだけのものも多いようだけど、DVDパッケージとして販売されて
いるものも多数ある。

私は感心してしまった。

梨恵はどんな感じで撮られたんだろうと思ったけど、動画も有りすぎるし、とても見つけられるも
のではない。

それに、顔よりもお尻の方が、ずっとしつかり映っているんだもの。

そんな事でネットを彷徨って夜更かしをして、ちよつと寝坊して起きた土曜日の朝。梨恵からラインが入った。

「昨日はお疲れ様。久しぶりに会えて楽しかったわ。」って。

私は、軽い感じで、

「私も楽しかった。昨晩はあれから、梨恵の出てるAVをネットで探しちゃった。」なんて、返信を送った。

「あら、そういうアルバイトに興味を持ったのかな。百合香もやってみたいなら、紹介するよ。」

「そうね、あんな程度ならやってみても良いかな。」

「あんな程度って、どんなのを観たのよ。」

「普通にウンチするだけのヤツだよ。でも、あれこれ観ていたら、いろんなのがあるんだね。体に塗ったり食べたり、あんなことまでするなんて信じられない。」

「それは極端なヤツだよ。そういうのが好きな人も居るんだろうけどね。」

「今日は、暇だつて言つてたでしょう。これから行つてみない。」

「行かつて、どこに。」

「AV作成してる事務所。撮影から編集まで、そこでやってるのよ。」

「ちよつと興味あるわね。どんな人が作ってるのか。」

そんなノリで、私は梨恵と待ち合わせて、その事務所に行くことになった。

事務所には、梨恵から前もつて連絡を入れてたらしく、プロデューサーと名乗るがっしりした体格の中年男性が迎えてくれた。

私に名刺を渡して、赤石と名乗る。

「やあ、弓枝さん。このあいだはありがとう。今日はお友達を紹介してくれるつてことで、楽しみに待つてましたよ。」

「えっ、弓枝」と思つたけど、そこは知らん顔をしてやり過ごす。

そうだよね。まさか本名でこんなことやるわけがないよね。

事務所とは言うけど、雑居ビルの間階の一室。

ファミリートタイプのマンション程度の広さだ。

ドアにも名前らしきものは出ていなかった。

下の郵便受けに、赤石プロダクションって書いてあったのは、ちらつと見えたから、そういう名前なんだろう。

隣の部屋から、もう一人の男性が出てくる。

ちよつとひよろつとした感じで、プロデューサーさんよりちよつと年配かな。

「こちらはカメラマンの塩田。まあ、プロデューサーだのカメラマンだのって言っても、この二人だけの超零細企業だから、何でもやるんですけどね。」

そう言って笑う。

「さつそくですが、こちらの作っている作品にご出演いただけののかな。」
いきなりそう訊かれて、戸惑う。

「内容は、こちらの弓枝さんから聞いているとは思いますが。」
そうだよね、ここまで来るってことは、その気があるってことだよね。

「あの、詳しい内容を聞かないとはつきりお返事が出来ないのですが、まあ、出ても良いかな、とは思っています。」

「では、詳しい内容の御説明をさせて頂きますね。」
そう言われて、奥の事務所のようなところに通される。
カメラマンさんが、私と梨恵にお茶を出してくれる。

「うちで作っているのは、特殊な分野のアダルト作品です。内容はある程度お聞きになつていますが、いわゆるスカトロものと言われるジャンルで、女性の排泄がメインになります。」
「はい、そこまでは聞いています。」

「世間では、ウンチを体に塗ったり、食べたりするようなハードなスカトロ系もありますが、うち

ではそういうハード系は作っていません。単純に女性にウンチをしてもらい、その動画を撮るとか、おしっこ動画を撮るとかだけです。」

「そんな動画を喜んで観る人が居るんですね。」

「そうなんです。有名なAV女優さんとおなじくらい、素人モノと言われるものも最近は人気が出ています。特に、そういう作品の中では、普通に身近にいるような雰囲気美人に何人も同じような事をやってもらって、一つのパッケージにして販売するのが主流になっていますね。」

「何人もまとめてですか。」

「そうです、素人さんですからセクシーな演技をするわけじゃないし、裸になったりセックスシーンがあったりするわけじゃないんです。」

『素人美女自然便10人分』なんていうのが多いですね。」

「自然便ですか。」

「そうですね。「浣腸便10人分」とか「おしっこ12人」とか、うちで撮るのは、だいたいそんな感じですね。」

「撮った映像はどうするんですか。」

「そうですね。ネットのアダルト系有料サイトに出したり、DVDにして、そういう系統のお店で販売したりレンタルしたり、お金になりそうなことなら、どこにでも出しますよ。」

ということは、私のウンチやおしっこをするシーンが、全国的にそれどころか世界中に公開されてしまうってことだ。

ちよつと恥ずかしい気はするけど、知り合いに観られるわけじゃない。

昨日、ネットで観ただけでも、あんなに沢山の動画が出ているんだし、梨恵のものが有るって知っていて探しても、見つかる気配もない。

それで、ちよつとしたお小遣いになるなら、ウンチくらい撮られても良いかな、なんて、だんだん思うようになってきている。

「もし、出演して頂けるなら、今から撮影をして、その場でギャラをお支払いしますよ。」

私が迷ってるのを見て、そんなことを言いながら、机の引き出しから封筒に入った一万円札を取り出す。

梨恵も、私なんて返事をするか、興味深そうに見守っている。

「じゃあ、やってみようかな。」

私がそう返事をする、赤石さんも塩田さんも、そして梨恵も、なんだかホッとしたような表情に変わる。

「ありがたい。この仕事は出演者を見つけるのが難しくてね。まさか、おおっぴらに求人広告を出すわけにもいきませんからね。」

と言って笑う。

「これから、契約書を一通り読んでもらって、それにサインをしたら、すぐに撮影。ギャラを受け取ったら、もう二度とここに来る必要ありません。一回きりの簡単な仕事ですよ。」

「あの、ここですぐに撮影ですか。」

「そうです。隣の部屋が撮影セットになってるんです。そこで応接セットに座って、私と話をしてください。その後、その後にその座っている椅子に上半身を預けてお尻をカメラに向けるような態勢になつてもらって、ウンチするシーンの撮影です。」

「ウンチって、トイレじゃないんですね。」

「トイレは狭くて、撮影が難しいんですよ。それに、こんな美人さんが、応接室の床にウンチを出すっていうのが、観てる人にアピールするんですよ。そのために、インタビューシーンで正面からの姿をきちんと撮って、この人が、今からどんなものを出すんだろうって、観てる人に期待させる。最後は、出したウンチのアップだったり、あなたが自分の出したものを指さしてるシーンだったりで終わるんです。編集して途中をカットしたり、別アングルの映像を重ねたりすることもありますけど、まあ、5分から10分程度の長さの動画に仕上げます。」

「衣装とかは。」

「今着ているもので大丈夫ですよ。これじゃない服が良いなら、着替えてきて後日でも良いですし、近所で買ってきても良いですけど、その分は自腹ですよ。」

赤石さんが言うと、

「一応、こういう撮影ですから、スカートやシューズが汚れてしまう危険もあります。こちらでも、何着か用意してあるので、それを着ていただいても良いですよ。」

塩田さんが、そんなふうにはフォローしてくれる。

ちよつと考えてみたが、梨恵と一緒にのお出かけというつもりで、可愛い系の服を着てるし、下着も可愛い系のきれいなものを履いてるから、このままで大丈夫だろう。

「カメラ向けられて、トイレじゃない場所でウンチするなんて、緊張して出ないかもしれない。」

「じゃあ、浣腸撮影にしましょうか。それなら確実に出ますよ。」

浣腸か、子供の頃にお母さんからされたような記憶はあるけど、どんなだったかは、もう覚えていない。

お尻の穴から入れて、ウンチを出すお薬だね。

こうなってしまったら、自然便だろうと、浣腸だろうと、あまり変わらないように思い、私はその言葉に頷く。

その後は、契約書の内容を一通り説明してもらう。

撮影した映像の権利は、作成者に帰する、とか、難しい言葉が並んでいるけど、撮った動画は赤石プロダクションのもので、それが大ヒットして大儲けしても、すべて赤石プロダクションのものになるという内容らしい。

撮影内容として、排便、排尿、浣腸と並んでいて、ちよつと恥ずかしくなっていました。

人によって、おしっこは撮られてもウンチはイヤとか、ウンチするのは良いけど浣腸はちよつと、とかあるらしい。私は三つとも丸を付ける事になった。

署名の欄まで来て、迷った。本名を書かなければいけないんだろうか。

「そこは、本名でなくても良いですよ。」

赤石さんが笑って言う。

「一応、映像作品に出演する女優さんという位置づけですから、芸名でOKですよ。この人も弓枝

さんっていう名前ですしね。」

そう言われて、梨恵はちよつと舌を出してふざけてみせる。

そう言われても、とつさに芸名なんて出てこない。

梨恵のふざけた顔を見て、ちよつと意地悪な事を思いついた。

「じゃあ、りえ、つてことにします。」

「一応フルネームでお願いします。」

赤石さんに言われ、姓も考え、「白岩李枝」とサインした。

「これで良いかな。ねえ、弓枝さん。」

つて言うと、

「大丈夫ですよ、李枝さん。これから人気が出て、有名AV女優になっても、ずっとその名前ですてね。」

つて、面白そうに笑ってくれる。

「なに言ってるの、今回限りで引退よ。」

梨恵は、自分が撮られるわけではないから、付き添いの気軽さでニコニコしている。

「ねえ、撮影の時も、立ち会うつもり。」

「うん、一人じゃ心細いでしょう。一緒に居てあげる。」

「それも良いけど、梨恵に見られてるところでウンチするのも、ちよつと恥ずかしいな。」

「何言ってるの、この二人には見られるんだから、私の事も撮影スタッフだとも思ってたれば大丈夫よ。」

「だって、梨恵は観てるだけの野次馬みたいなスタッフでしょう。そうだ、この前梨恵が撮ってもらったっていう動画を観せてよ。」

そしたら、お互い様だから、私の撮影現場に立ち会っても良いわ。」

「うーん、仕方ないわね。」

「この前のは、編集も終わって、ちょうどDVDのサンプルが出来たところだよ。ここで観てみる

かい。」

塩田さんからの言葉に、梨恵も拒否は出来ない。

4人で、モニター画面を観ることになった。

梨恵が座っているシーンに、赤石さんが声だけ登場して、あれこれと会話を進める。

「今朝ウンチは出ましたか。」

「昨日は何を食べました。」

「これからここでウンチをしてもらうんだけど、きちんと出そうかな。」

「もし出なかったら、浣腸するけど良いかな。」

なんてあれこれ質問していて、梨恵はちよつと恥ずかしそうにうつむいて、それに答えている。

その後は、スカートをめくりあげ、ショーツを膝までさげて、四つん這いスタイルで、ウンチをすることになる。

梨恵はしばらく頑張っていたけれど、「やっぱり出ません。」

とギブアップして、浣腸されることになる。

イチジク浣腸が登場し、赤石さんの手がそれを持って、梨恵のお尻に迫る。

梨恵の横顔と、お尻の穴のアップが交互に映し出され、そのアップのお尻の穴に浣腸が挿しこまれ、ゆつくりと押しつぶされる。

梨恵の横顔は、浣腸の液を注入される時の、ちよつと怯えたような表情から、ウンチがしたくて我慢している苦しそうな表情に、次第に変わって行く。

そして、「もう我慢できません。出ちゃいます。」と悲鳴のように言うと、お尻の穴がぶつくりと膨らみ、中から茶色に濁った液と、ウンチが噴き出してくる。

ウンチが出るシーンでは、お尻の穴がアップになるから、画面の中にアソコも映っているけど、そこにはきちんとモザイクが掛けられている。

全て出し終わったら、ティッシュペーパーでお尻を拭き、自分の出したウンチを見せられる。

「こんなのが出ただけど、どう。」なんて訊かれて

「やだ、臭い。」なんて恥ずかしそうに笑っている。

最後に、「どうかな、すつきりしたかな。」という赤石さんの声と、梨恵とウンチが一緒に映ってるシーンで、画像はホワイトアウトする。

昨晚、何本も観たような動画で、インタビューシーンから最後まで全部で10分あるかどうかという長さだった。

普段の梨恵とは違う、恥ずかしさとか色っぽさとかを感じさせ、こういうのが好きな人も居るんだろうな、と思わせるような動画だった。

「こうやって、何人も同じような作品を撮るんだけど、観てるひとは、それぞれ好みが分れるから、10人のうちの3番目の娘が良いと思う人も居れば、5番目が好みだっていう人も居るんだよ。それぞれ、自分の憧れの人だったり、同僚や同級生やご近所さんや、面影が似たような人を重ねて観たりもするしね。割と平気な顔してウンチする娘が趣味って人も居るし、最初から最後まで恥ずかしがつてる女の子も居て、そういうのが良いっていう人も居るからね。」

なかなかAVも難しいのね。

「李枝さんも、自分なりのリアクションをしてくれれば良いんだよ。」

さて、いよいよ私の撮影本番。

隣の部屋には、応接セットの長椅子だけが置いてあり、隣にはわざとらしくくらいに似合っている観葉植物の鉢もある。

床も壁も白系の色で統一された部屋だ。

ウンチの茶色やおしっここの黄色が目立つからかな。

床一面に透明なビニールシートが敷いてあって、ちよつと驚いてしまう。

ここでおしっこやらウンチやらするんだから、直に床にしちゃったら掃除とかも大変なんだろう。

「ここにさらにペットシーツを敷いて、その上にももらうことになるけど、狙ったところから外れる場合もあるからね。出す時には遠慮せずに、思いっきり出しちゃって良いんだよ。」

思いつきりつて言われてもね。

たしかに、いつもはトイレに座ってウンチをするから、自然に重力で落ちていくけど、さつき観た梨恵のようにワンワンスタイルでウンチするなら、横向きに飛び出すよね。

力むと遠くまで飛ぶのかな。力を入れずにそのまま出したら、膝の間あたりにボタバタと落ちるのだろうか。スカートやショーツが汚れたら嫌だな。

そんなことを、ちよつと考えてしまう。

最初は、インタビューシーンの撮影で、私はソファアの中央に座らされた。

塩田さんがカメラをセットして撮り始め、赤石さんに合図を送る。

「じゃあ、お名前から聞かせてもらおうかな。」

「白岩李枝です。」

「今日の撮影の内容は解っていますね。これからここでウンチをしてもらうんだけど、心の準備は大丈夫かな。」

「はい、たぶん……大丈夫だと思います。」

「じゃあ、いっぱいウンチを出してくれるのを期待してますよ。」

そんなふうに言われると、なんだか恥ずかしさが起こってくる。

「今朝はウンチはしましたか。」

「今日はまだです。昨日の朝、ちよつと出たつきりです。」

「ちよつとつていう事は、しつかりとは出てないのかな。もしかして便秘気味ですか。」

「普段は、きちんと出るんですけど、時々、二日か三日くらい溜めちゃうこともありますね。」

「じゃあ、今日は一日分のウンチが溜まっているってことですね。大丈夫かな。出せるかな。」
そんなことを訊かれると、なんて答えて良いのか解らない。

恥ずかしさもあつて、ちよつと下を向きかける。

「もしも出なかつたら、浣腸ですよ。浣腸すればスッキリと大きなウンチがでるはずですよ。」

「はい。浣腸もされる覚悟はできてます。」

私は恥ずかしさを隠して、カメラに向かってにつこりと笑って答える。

「昨日は何を食べました。」

「浣腸された経験はありますか。」

「その時の事を覚えてますか。どう感じました。」

などと、あれこれ訊かれる。

こんなに長く撮られていると、このシーンだけで、10分以上になってしまいそうだ。

後で聞いた話だが、この会話の中で、私の表情や声のトーン、返事の内容などを選んで、良いシーンだけを編集するのだそうだ。

「じゃあ、実際にウンチをしてもらいまじょうか。」

赤石さんが、そう宣言して、私を逆向きにさせる。

今まで座っていたソファに肘をつき、床に膝をついて、お尻をカメラに向ける。

塩田さんは、もう一台のカメラを横側にセットして、そちらも撮り始めるお尻の正面と横顔とにカメラを向けられながら、スカートをまくりあげられ、赤石さんの手で、ショーツを膝まで下げられてしまう。

実際にお尻を出されて、それを三人の眼と二台のカメラに観られていると思うと、とつても恥ずかしくなって、このまま、ここから逃げ出したいくなる。

「さあ、ウンチしてください。」

と赤石さんに言われるが、カんでみてもウンチは出てくれない。

しばらく頑張ってみたが、ウンチよりおしっこがしたくなってしまった。

「あの、ウンチじゃなくておしっこがしたくなりました。」

「そのまま、しても良いですよ。」

そう言われても、こんなポーズでおしっこなんかしたことがない。

膝に絡んだショーツにかかってしまいそうで躊躇っていると、

「パンティーにかかっちゃうといけないから、それを脱いでも良いですよ。」

と、助け舟が出る。

人前でショーツを脱ぐのに喜ぶのも変だけど、どうせもうお尻は丸出しになっているんだから、いまさらの話だ。

立ち上がってショーツを脱ぐと、梨恵が受け取ってくれる。

元の体勢に戻って力を入れると、おしっこは斜め後方に、きれいに飛んだようだった。

「しっかり出たね。」

と、赤石さんが嬉しそうに言う。

「このまま。ウンチも出せるかな。」

おしっこはしちやったものの、やっぱり恥ずかしさもあり、ウンチは出そうもない。

「やっぱり出ません。」

「じゃあ、最初に言ったとおり、浣腸ですね。」

まあ、流れとしてはこうなるんだよね。

カメラの前でウンチをするのも恥ずかしいけど、浣腸をお尻の穴に入れられるのも、ものすごく恥ずかしくて怖くなってしまう。

私の心の中のためらいなど、気にする様子もなく、赤石さんはイチジク浣腸を手にして、そのキャップを外す。

「じゃあ挿れるから、左側のカメラの方を向いていてください。顔が良く見えるようにね。」
なんて言われてしまう。

お尻の穴のアップは、塩田さんがカメラ位置を上手くずらして撮っていて、このシーンでは、イチジク浣腸の先っぽが私の体内に侵入する様子が、しっかりと映像に残されているのだろう。

当然だけど、私の顔は笑顔ではなく、怯えたような表情をしているだろう。

「これからお薬を入れますよ。」

その宣言と同時に、お腹の中になにか冷たいものが流れ込む感触がしてきた。

子供の頃に、お母さんにされたけど、こんな感じだったかな。

もう時間も経っているし、子供の時にされた感覚など思い出せない。

「はい、全部いれちゃいました。」

赤石さんはそう言つて、押しつぶされて空になったイチジク浣腸を、カメラの前でアップにする。私のお腹は、まだウンチがしたいわけじゃないけど、入れられた液体で、変な感じはしている。

「どうしようかな。我慢してる間は、パンティーを履いてもらっても良いんだけど。」

私もちよつと悩む。このままお尻を丸出しで、ウンチが出るまで我慢するか、一旦ショーツを履いてお尻を隠して、ウンチする時にもう一度脱ぐか。

「我慢するには、履いての方が良いんだよね。お漏らししちゃうとパンティーを汚しちゃうから、その分我慢が出来るんだ。」

でも、脱ぐタイミングを間違えると、パンティーの中にお漏らししちゃうことになっちゃう。そう言つて笑う。

「お漏らしですか。」

「うん、そういうジャンルも有るんだ。お漏らしが好きっていう人も居る。」

その場合、お漏らしウンチの入ったパンティーを脱がせて、ウンチまみれのお尻を撮ることになる。」

「それは嫌です。」

「まあ、そんなにギリギリまで我慢する事もないからね。好きにして良いよ。」

私はちよつと考えたけど、ウンチが出る前にもう一度脱ぐことにして、梨恵に預けたショーツをもう一度履く。

「出そうになるまでは、どんな格好していても良いよ。」

と言われたので、最初に撮られた時の様に、ソファアに座って待つことにした。

正面で、塩田さんがカメラを構えている。

私はカメラに向かってにつこりと笑つて見せるが、そろそろお腹の中がごろごろしてくる。

赤石さんは私の表情を眺めて、

「そろそろ、したくなつたかな。」

と言い当てる。

「もうちよつと我慢すると、波が引くからね。最初の山は我慢しようね。出来るかな。」

私も、まだ我慢はできそうだったので、素直に頷く。

でも、一度は軽くなった便意も、少し経つとまたさつき以上になって復活してくる。

私が、お腹を押さえて前かがみになって我慢していると、

「またしたくなつてきたかな。」

と赤石さんに言われてしまう。

「そこを越えると、また三度目の波までの間に、ひと息つける時間が有るんだけどね。そこまで頑張ってみるかいい。」

頑張りますつて言おうかと思つたけど、そうやってウンチを我慢しても、結局はここで出すことになるんだし、病気とかでどうしてもそこまでしなきゃ治らないような話でもない。

「どうかな、無理かもしれない。」

と返事をする。

「あんまり無理してお漏らしされても、後始末が大変だしね。駄目なら、パンティーを脱いで、さつきの姿勢になつて出しても良いよ。」

そうだ、ここで無理して漏らせば、ショーツの中にウンチの山が出来るし、お尻もウンチまみれになつてしまう。

ウンチをするところを撮られるよりも、さらに恥ずかしい事になる。

私は、ショーツを脱いで、再び梨恵に渡し、最初のポーズになる。

赤石さんがスカートを捲り上げ、お尻を丸出しにされる。

「さて、いつでも出してOKだよ。」

いよいよ排泄シーンか、と思つた時に、突然激しい後悔に襲われる。

なんで、私がお尻を出して、浣腸されて、ウンチをすることで撮られているんだろう。

昨日の今は、そんな事が起こるなんて想像もしていなかったんだ。

見られながら、撮られながら、こんな格好でウンチをするなんて。

さつきまでは、簡単なアルバイトのつもりだった。

インタビューの時にだって、笑顔で浣腸されるつもりでいた。

いざ、ウンチを出す時になって、いきなり羞恥心の葛藤になってしまうなんて。

考えてみれば、便秘で病院に行つて、看護師さんに浣腸されたとしても、やっぱり恥ずかしさはあるよね。

でも、病院だったら、それなりに気を使つてくれて、なるべくお尻を見ないとか、ウンチする時はトイレに行かせてくれるとか、してくれるだろう。

こんなふうに、カメラの前でワンワンスタイルで、床に向かってウンチをするなんて、どう考えても異常な行為だ。

そんな思いが、一度頭に浮かぶと、自分の状況がとても惨めなものに思えてくる。

思わず、頭を下げて、泣き出しそうになる。

撮影を止めて、トイレに逃げ込んで、そこでウンチをしたい、なんて、ふと頭を過ぎるが、こうやって契約書も交わしたうえで、撮影をしているんだから、それも出来ないだろう。

「頭を上げて、左側のカメラに顔を見せてね。」

赤石さんの声が聞こえる。

しかたなくカメラの方を向き、髪をかき上げるけど、眼は潤んでいるかもしれない。

このまま、ずっとウンチを出さずに、我慢したい。

出来そうもない、そんな事さえ考えてしまう。

でも、そんな思いとはうらはらに、お腹の中は嵐が渦巻いている。

恥ずかしくて見られたくない思いと、浣腸の効果とが、お尻の穴を挟んで勝負をしているが、勝敗はもう見えている。

「あっ。」と思わず声を上げるが、もうお腹の中の圧力に抵抗して、お尻の穴を閉める力は残っていない。

ピュツと、先走る液が飛び出したのが、自分で感じられる。

それに続いて、固形物が噴き出してくる。

まるで銃口から飛び出す銃弾のようだ。

ウンチは、最初の銃弾のような硬いものから、バナナのような普段の硬さに変わり、次第に、形の無い柔らかな下痢状のものになってくる。

次々とウンチが出て行くにつれて、お腹の痛みは軽くなってくる。

でも、完全にすつきりした感じには程遠い。

まだまだ出したい気がして、お腹に力を入れると、残っていたウンチが流れ出すように出てくる。

「頑張つて、沢山出してるね。」

そんな赤石さんの声に、再び羞恥が戻ってくるけれど、こんな中途半端な感じでは終われないから、お腹に力を入れて、最後まで絞り出そうと頑張ってみる。

お腹に力を入れると、またおしっこもしたくなる。

今度は、しても良いかとも訊かず、そのまま出してしまう。

どうせ、床はさつきのおしっこ、硬いものから柔らかいものまで、いろんな状態のウンチが撒き散らされているんだ。

「おや、またおしっこも出たね。大サービスだ。」

なんて言われてしまう。

塩田さんは何も言わず、カメラ操作だけに専念している。

おそらく、映像に他の人の声が入ってはまずいのだろう。

お尻を正面からアップで撮っているから、お尻の穴もあそこもしっかりと撮られているのだろうけど、おしっこの噴き出す穴は、さすがにモザイク入れなきや外に出せないよね。

そんな余計な事まで考えてしまう。

だんだんとお尻が下がってきて、カメラアングルとして物足りないのだろう。

「もうちよつと、お尻を上げたままで出してね。」

なんて、赤石さんに言われてしまう。

塩田さんも無言だが、普段おしゃべりな梨恵も一言もしゃべらないのは、やはり映像に声が入らないように気を使っているのだろう。

お腹の中から断続的に流れ出してくるものが無くなり、ホッとひと息つけるようになったのは、我慢が限界を超えて、ウンチを出し始めてから、5分以上経っていたように思った。

「そろそろ、お終いかな。」

赤石さんの言葉に頷くと、ティッシュの箱を渡してくれる。

それで、自分でお尻を拭けという事だろう。

もちろん、お尻を拭くシーンもカメラに収められている。

「じゃあ、起き上がって、自分の出したものを見てみようか。」

そう言われて、立ち上がって向きを変え、自分のウンチと向き合う。

大半はペットシートの上だが、そこからはみ出して散らばっているものもある。

自分の出したものとは言え、こうして床の上に撒き散らされると、ある意味壮観でさえある。

普段は、便器の中の水に潜っているから、自分がどれだけのウンチを出したかなんて、確かめようもないが、ここでは一目瞭然だ。

「そこにしゃがんで、解説してくれるかな。」

解説って言われても、戸惑ってしまう。

しゃがみ込むと、臭いも漂っているのに気が付き、また顔が赤らんでしまう。

「一番遠くまで飛んでる硬そうなのが、最初に出たやつだよ。それは、昨日の朝から溜め込んでいたウンチかな。一昨日食べたものが、ウンチになったものだね。」

などと、赤石さんが解説してくれる。

私は怖々と、それを指さすだけだ。

「周りに流れてるのは、浣腸液も一部分有るけど、ほとんどは李枝ちゃんのおしっこだからね。」

などと、からかうような口調で言われる。

「じゃあ、最期に、カメラに向かって『こんなのが出ました』『お腹がすつきりしました』って言うてね。」

私がカメラに向かって、言われたことをおうむ返しに言うと、

「はい、OK！」

と声が掛かり、撮影は終わった。

私は呆けたようにソファーに座り込んでしまった。

梨恵が、持っていたショーツを渡してくれたので、ノロノロとそれを履くが、またそのまま座り込んでしまい、梨恵が隣に座って、頭を撫でてくれる。

赤石さんと塩田さんは、テキパキと撮影の後片付けをする。

カメラを事務所に置くと、バケツとチリトリを二つ持ってきて、そのチリトリで挟むようにして、私の出したウンチとおしっこ寄せ集め、バケツに入れる。ペットシートの上のウンチもバケツに入れ、ペットシートをお尻を拭いたティッシュは、ビニール袋に入れ、小さく丸めて、口を縛ってしまふ。

バケツの中身は、チリトリと一緒に何処かに持って行ってしまふ。
たぶん、トイレに捨てに行つたのだろう。

モップで床を拭き、窓を開けて換気をし、デオドラントスプレーを吹くと、もうさっきまでのウンチの散らばつた部屋の痕跡は、どこにも残っていないかつた。

片付けが終わると、赤石さんに促され、四人で事務所に移動する。

もう一度、今度は冷蔵庫からアイスコーヒーを出して、塩田さんが4つのコップに注いでくれる。

「お疲れ様でした。良い画が撮れました。」

「ありがとうございます。でも、本当にあんなこととして良かったのかな。」

「良かったか悪かったかは、あなたの考え次第ですからね。」

ちよつとしたアルバイトでお金を稼いだと思うか、見せてはいけない行為をやってしまったと思うか。」

まあ、今さら何を言っても仕方ない話だ。

「でも、あなたは美人だし体も魅力的だし、頭も良いみたいだから、その気になれば、この業界でも成功するかもしれませんね。人気女優になれますよ。」

「頭も良くないとダメなんでしょうね。でも、どうして私が頭が良いって。」

「だって、芸名を書くとき、とつさに思いついたでしょう。たぶん李枝つてのは、弓枝さんの本名だろうし、白岩つてのは、私の赤石をひねったものじゃないかな。そういうアドリブが効く人は、いろんな場面で有利なんですよ。」

「AVで人気女優って言われても、気が進まないですね。」

「それはそうでしょう。今日のような事を次々とやらなきゃならないし、もつと過激な撮影をしなきゃ、ステツプアップしませんからね。」

赤石さんは、そう言つて笑う。

「もつと過激ですか。」

「そうです。例えば今日のような路線で行くなら、単にウンチをする動画じゃ、二人まとめたパッケージの中の一人にすぎません。もうちよつと過激で長い画だと、二人とか三人とかでワンパッケージになります。ドラマ風に男優と絡むとか、絡みじやないとすれば、全裸になつて産婦人科の診察みたいな恰好で、注射器みたいな浣腸器で浣腸されて、そのままの恰好で排泄だったりです。」

「やっぱり、売れるためには、そうやって過激な事をするんですね。」

「そうですね。本当に気に入られそうなら、密着ものなんてのも良いかもしれませんけどね。」

「密着ものですか。」

「ええ、『白岩李枝排泄48時間』なんてタイトルで、丸二日間くらいのおしっこやウンチを撮るんですよ。」

サービスショットで、入浴や着替えのシーンとか、食事シーンなんかを混ぜながらね。」

「だって、二日間だってウンチは一度か二度でしょう。」

「そこは上手く編集して、実際には一週間分くらいのシーンを、二日分くらいに見せるんですよ。」

「構想はあるんですけど、なかなか問題も多くて、まだ実行出来ないんですけどね。」

「問題ですか。」

「一番の問題は、それを撮らせてくれる女優さんが居ないってこと。それから、カメラマンの塩田の負担が大きすぎることですね。」

「女優ですか。そこそ居そうな気はしますけど。」

「じゃあ、あなたならギャラをいくら出せば、その仕事を受けます。」

「いや、私はやりませんよ。でも、そう言われると微妙ですよ。一週間、ずっとウランチやおしっこを撮られるんでしょう。」

「それなりの金額を出せば、出演してくれる女優さんも居るでしょうけど、ウチのような零細企業で、そんなに高いギャラは払えないですからね。」

「この業界も大変なんですね。」

「そこまで資金をつぎ込んで、当たれば良いですけど、売れなかつたら即夜逃げですよ。と、塩田さんが口を挟む。

「さつき撮った画像を確認してみますか。まだ、これから編集したりモザイクを入れたりして、完成形に仕上げるんで、加工前の生画像ですけど。」

私はちよつと迷った。

どんな風に撮られたのか、観たいような気もする。

でも、もうこれ以上、自分の心にダメージを与えたくない。

もう一度客観的に観れば、また新たな羞恥心が湧いてくるだろう。

「気にはなるけど、遠慮しておきます。さつきの経験だけで、十分すぎる刺激でしたから、それをリピートしたら毎晩悪夢にうなされそうです。」

「そうですか。じゃあ、その代わりと言ってはなんですが、これを差し上げましょう。」

そう言って、さつき観た梨恵の出ているDVDをプレイヤーから取り出して渡してくれる。

「テスト版ですからね。どうせ表には出せないんですよ。」

確かに、盤面も白いままだし、パッケージも無い。

「えっ、それは。」

と、不満そうに梨恵が洩らす。

「いいじゃないか。あなたは実際の撮影現場に立ち会ったんだから。そうだ、弓枝さんにも御礼を渡さないかね。」

赤石さんはそう言っつて、机の中から封筒を引つ張り出し、中の五千円札を一枚、梨恵に渡す。

「また、誰か居たら紹介してくださいよ。」

私は、その一瞬ですべて理解した。

私を紹介したことで、紹介のお礼が貰える仕組みだったのだ。

「李枝さんも、誰か良い人が居たら紹介してくださいね。きちんと撮影が出来たら、お礼を出しますから。」

「それから、お二人とも、またこの仕事をやつても良いと思ったら、再度のご出演もお願いします。二回目か三回目までは、今回と同じような内容で、撮れると思います。その先は、だんだん長くて過激な内容になりますけどね。」

ニコニコ顔の赤石さんと塩田さんに見送られて、私たちは事務所を後にした。

「弓枝さん。」

私はわざと、ちよつと恐い声で言う。

「私の事を、売り渡して手数料を稼いだのね。」

「そんな事ないわよ。私がAVに出たっていう話をしたら、あなたが興味あるって言ったんじゃないよ。」

「でも、紹介料を貰う気だったんだよね。」

「そんなふうに言わないでよ。」

「まあいいわ。私はあなたが映ってるDVDを持ってるんだもの。」

「ウツ、それは。」

「冗談よ。二人ともAV女優になっちゃったんだから、仲良くしようね。」

「ありがとう、百合香にそう言ってもらえてホッとしたわ。」

「ねえ、さつきあんなにウンチを出しちゃったからお腹空いたわ。」

「今夜も一緒に飲みに行かない。」

「うん、良いよ。」

「じゃあ、梨恵のおごりね。」

「ええっ・・・」

